



の味覚に舌鼓。

翌日は小雨が降るなか、上海市内の観光を。まずは美術館で中国人画家による油彩や水彩画、水墨画などの近代絵画を鑑賞しました。素晴らしい作品が数多くありましたが、前衛絵画のフロアにある展示作品だけはどれひとつよさがわかりませんでした。

次に上海のシンボルタワーである「東方明珠塔」の展望台から街並みを望みました。このタワーは浦東新区にそびえる高さ468mのテレビ塔で、高さ350mの上球と263mの中球、98mの下球部分に展望台が設置されています。なかでも上球から見る浦東から外灘までの360度の景観は、あいにくの天気とはいえ一見の価値がありました。



アジアで1位の高さを誇る「東方明珠塔」



展望台からの眺望

午後からは、今や上海を代表する観光スポットとなっている「豫園」へ。1559年(明代)に造園された「豫園」は、完成までに18年もの歳月をかけた江南きっての名園。中国式庭園内に

は、三穗堂、仰山堂、点春堂、打唱台といった名建築が点在し、なかでも江南随一といわれる銘石の数々が見ものです。庭園見学とあわせて、周辺に広がる古風な豫園商域でのショッピング



上海を訪れる観光客がまず最初に目指すスポット「豫園」



ストローで飲むスープだけの点心「蟹黄灌湯包」

やグルメもお勧め。とくに「南翔饅頭店」は小籠包の人気店で、テイクアウト専用の1階はいつも行列ができています。ここでは注文する値段によって席が違うので、少々割高でもすいている3階の席で小籠包をはじめ点心類を食べました。肉や魚介類と野菜の旨みが詰まったスープだけの「蟹黄灌湯包」(22元)は絶品でした。

そして上海ナイトは、おしゃれな店が点在する新天地で。ここは話題の新店舗が続々とオープンしているため、昼夜を問わず多くの客が集まり賑わっています。センスのよさが評判のレストランバーやディスコをはしごして、夜遅くまで楽しみました。

次の日は雨が止んだものの、終日陽が射すことのない曇天でした。この日はレトロな街並みが広がる上海郊外の水郷古鎮へ。古くから豊か

な農作物に育まれてきた江南地方には、水路が網の目のように張り巡らされた水郷古鎮が、今も数百年前の面影そのままに残されています。



レトロな街並みが広がる水郷古鎮



かつて庶民の移動手段だった小舟



レストランの店先で売られている名物「萬三酥蹄」



蒋介石が好んだ「糯米酒」と「五香豆」

「周庄(周莊)」は、江南水郷を代表する運河と橋の街で、古くから物資の集散拠点として栄えてきたところ。運河の脇には、明や清代に建てられた民家が連なっています。橋のたもとの狭い通りにはお土産店やレストランが並んでおり、レストランの店先には江南地方の大富豪であった潘万三ゆかりの「萬三酥蹄」(豚足を醤油で煮込んだもの)が売られています。いくつ

もの石橋を渡り歩き、レストランでは蒋介石が好んだ「五香豆」と「臭豆腐」を肴に「糯米酒」を飲み、悠久の歴史散策の旅を満喫しました。

翌朝、虹橋空港から7:55の便で廈門へ。上海からは約1時間30分のフライトです。到着後、現地ガイドと合流して福建省に点在する客家土楼の観光へ。さすがは烏龍茶で有名な福建省と

あって、道中の風景は平地から山の斜面に至るまで一面茶畑でした。

かつて北方民族に攻め入れられ、安住の地を求め南下してきた漢民族の客家人。よそ者として扱われ、居住条件の悪い山間部に住むことを余儀なくされた客家の民が異郷の地で平穩無事に暮らすには、血縁一族が衣食住をともにして団結する必要があります。集団防衛のために考え出したのが土楼と呼ばれる巨大な城塞集合住宅です。世界でも他に類をみない分厚い土壁で囲まれた集合住宅には、環形土楼、群体住居、方形土楼、斜面土楼と、異なった形態や建築構造をもつ4種類の土楼があります。土楼が数多くあるのは、

福建省の永定、南靖、華安などで、なかでも最大規模を誇るのが永定で、特色のある土楼があちこちに築かれています。永定の土楼のなかでも最大級の環形土楼である「承啓楼」は、直径が61mあり、57家族319人の一族が住んでいます。土楼は、一部人の住まなくなったなかば廃墟に近いものもありますが、多くは今でも人々が暮らす私的な住居で、一步中に入ると生活感漂う優しい空間が広がっています。土楼内は、1階中央に宗祖をまつり、その周りで食事の支度をするのが一般的で、2階は倉庫、居室は3階以上というのが多いです。



福建省の山村の茶畑



永定の土楼群



外敵に備えた隠し通路が残る「二宜楼」



今なお大家族が暮らす「二宜楼」

たいていのガイドブックには、道路が整備されたので廈門から永定土楼まで車で片道約3時間30分と書かれていますが、実際には片道5時間はかかります。ですから廈門からの日帰り観光ならば、車で片道約3時間の華安土楼をお勧めします。華安土楼は、南靖土楼や平和土楼に比べても、土楼自体が大きく残っており、とくに蔣一族の「二宜楼」(1770年に建工の二重環形土楼、敷地9300㎡、高さ16m、部屋数213)は、土楼のなかでも最も優れた構造や装飾をもつといわれています。ここでは、土楼内に土楼博物館を設置している「南陽楼」(1817年に建工の二重環形土楼、敷地3100㎡、高さ16m、部屋数

96)と2階建て方形土楼の「東陽楼」(1817年に建工、真正面幅45.8m、縦深さ26m、部屋数96)も見学できます。

永定や華安などの土楼はユネスコの世界遺産への申請も受理されており、早ければ2008年には世界遺産に登録される見込みとのこと。ちなみに土楼が発見されたのは、20世紀の後半です。米国の軍事衛星によって見つげられた巨大な土楼群を、米軍が中国の軍事施設(ミサイル基地)ではないかとの嫌疑で調査したことにより見出されたのです。

「客家」は“よそ者”“お客さん”といった意味で、唐から元のころに華北から移住してき

た人々の子孫であると傳承されています。中国の大多数派である漢民族の一支系でありながら、客家語を使用し、共同の習慣、信仰などで結ばれているのが客家人です。政治家では、太平天国の乱で知られる反清朝の英雄「洪秀全」や中華民国建国の父「孫文」、改革開放の指導者「鄧小平」、台湾の前総統「李登輝」などが、実業家としては常備薬タイガーバームの創業者

「胡文虎」が客家人として知られています。そうした優秀な政治家、実業家、文化人を数多く輩出した客家の人々を無視して、現代の中国やアジアを語ることはできないといっても過言ではありません。中国国内では、客家の子孫は主に広東省東部、福建省西部と江西省西南部の三角地帯の山間部に集中して住んでおり、現在の総人口は約 1500 万人です。



土楼内の憩いの空間



コロンス島から廈門市内を望む

廈門は、明代から貿易港として栄え、経済特区として発展する港湾都市。街には高層ビルの他に欧風のレトロな建築も多く、伝統と新しさが調和した見事な景観を形成しています。繁華街のメインストリートは平日でも歩行者天国の

ため、買い物客や観光客で終日賑わい、屋台もズラリ。そこで早速、屋台ならではの牡蠣焼きや包子をはじめ、鶏の血を固めた食べ物などを賞味しました。夕食は港町ならではの新鮮な海鮮料理を堪能。上海の街では 2008 年の北京五

輪よりも2010年の上海万博一色でしたが、廈門の街ではあちこちに北京五輪のデコレーションが置かれ、お土産店の店頭にはマスコット人形をはじめ、多数の五輪グッズが並べられており、オリンピックムードの高まりを感じました。

廈門での最大の見どころは何と云っても『海上の花園』と称される風光明媚なコロンス島。1842年にアヘン戦争の講和条約である南京条約が締結されたことにより島内には外国人公館などが数多く建てられ、中華民国成立後には急速に華僑の別荘も建ち並び、島は一層華やかさを増しました。また、コロンス島からは多くのピ

アニストが輩出されており、ピアノ普及率が高いことでも有名で、別名ピアノ島とも呼ばれています。

島内には電気カート以外の車は一切走っていません。ですから観光用カートに乗るよりも徒歩でのんびり回ってみるのがよいです。その際は、地図を手にして歩くよりもガイドの案内で歩くことをお勧めします。島へは船で行くため、乗船場にはガイドがいます。ガイドの多くは島の住人で、とても親切に観光案内してくれます。しかも終日のガイド料が僅か20元ととても格安です。



2008年北京オリンピックのデコレーション



「海の花園」と称され、異国情緒あふれるコロンス島



電気自動車の救急車



退職日、友人の家族と慰労の宴

廈門から上海に戻り、私の退職日となる上海最後の晩は、友人宅で友人の家族らによる労いの晩餐会。上海蟹をはじめ、スッポンや豚足料理などの名物料理から家庭料理に至るまで数多くの「好吃料理」をご馳走になりました。「謝謝」

上海は、地図上では屋久島と奄美大島の間際の緯度に位置するのですが、滞在中はあいにくの天気でもとても寒かったです。市内には地下鉄、路線バス、タクシーなど、さまざまな交通手段がありますが、移動で最も便利なのはタクシーです(基本料金 3km まで 11 元)。街の至るとこ

ろで拾うことができますが、往來の激しい通りではつかまえにくく、とくに利用者の多い雨の日に拾うのは四苦八苦しました。また、上海のドライバーは皆乱暴運転で、交通ルールはあつて無いようなもの。それでも滞在中に一度も交通事故を見なかったのは驚異です。

上海最後の晩に乗車したタクシーのラジオからは、この泡沫のような旅を締めくくるかのように、日本語の歌詞で歌う今は亡きチャイナの歌姫テレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」が流れてきました。「再見、上海」